



Title	稀代のオネットム、井元秀剛さん
Author(s)	山上, 浩嗣
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 112-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

稀代のオネットム、井元秀剛さん

山上 浩嗣

井元さんは、七年年少の私に「さん」づけで呼ぶことを許してくださっていた。ここでもそうさせていただく。

井元さんは、誰もが認める天才である。一流の言語学者でありながら、囲碁、将棋、書道、手品、パソコン（ほかにもあったかもしれない）について玄人顔負けの技能を有する上に、五十歳を過ぎてから本格的に体操競技に取り組み、なんと鉄棒の大車輪を修得したというのだから。しかも、井元さんがすごいのは、そこに至るまでの努力をまったく苦にすることなく、心から楽しんでいるという点である。これまで多忙な合間に教室に通ったり、怪我や筋肉痛をおして競技会に臨んだりしたそうだが、それを語る口ぶりは淡々としていて、自慢気なそぶりもまったくない。

「阪大文法」（朝日出版社刊『新・フランス語文法』のこと）を改訂するための会議で、提出した例文について春木仁孝先生からダメ出しを食らうのは、いつも私と、意外なことに井元さんだった。私はそのつど落胆していたが、井元さんは屈託なく、「なるほど!」とか「そうか!」などと明るく返して座を和ませていた。もちろんその一方で、本書への井元さんの貢献は大きく、とりわけ、tとtという二つの時間軸上に複数の時制を並べてそれらの相互関係を示す明快な図は、長年の時制研究の独自の成果だろう。井元さんは、先年退職された三藤博先生とともに、研究において緻密な理系的思考を駆使しておられた。

井元さんはまた、酒を一滴も飲まれないが、同僚同士の宴席にもよく顔を出された。いつだったか、高校時代の初恋の顛末を詳細に披露されたことがあった。私はその素朴で純真な語りに胸を打たれた。井元さんは、心は少年のまま大人になられたのだ。きっとご退職後も、心も頭も体も若いままだろう。

十七世紀フランスの社交界では、「オネットム (honnête homme)」が理想的な人物像とされていた。

「彼は数学者だとか、説教家だとか、雄弁家だなどと言われるのではなく、オネットムだと言われるようであればならない。私が好むのは、この普遍的な性質だけ。」（パスカル）

「真のオネットムとは、何も鼻にかけない人のことだ。」（ラ・ロシュフコー）

井元さんは、まさに稀代のオネットムである。

（大阪大学教授）